

令和7年度 川越町小規模保育事業者等巡回指導事業 報告書（概要版）

1. 事業概要

本事業は、川越町内の小規模保育事業所、保育所、幼稚園、認定こども園等を対象として、巡回コーディネーターによる巡回指導及び参加園相互の意見交換を通じ、保育・幼児教育の質向上及び職員の資質向上を図ることを目的として実施された。

本事業では、単なる指導型ではなく、各園が相互に実践を学び合い、町全体として保育・幼児教育を支える関係づくりを重視した点に特徴がある。

また、園間の交流や公開保育、意見交換を通して、各園が抱える課題を共有し、今後の川越町全体の保育体制の方向性を検討する契機となった。

2. 事業の背景と目的

川越町では、小規模保育事業所の設置や川越幼稚園の認定こども園化を見据え、保育・幼児教育体制の再構築が求められている。

特に未満児保育、発達支援、保護者対応、人材確保、職員研修など、多様な課題が顕在化しており、園単独では対応が難しい場面も増加している。

そのため、本事業では、外部アドバイザーによる助言だけでなく、各園の主任層等が実際に他園を巡回し、保育実践や環境構成、職員体制、園内研修等を直接見ることにより、互いの実践を共有し、学び合う仕組みづくりを目的とした。

3. 実施体制

参加園は、北部保育所、中部保育所、南部保育所、川越幼稚園、ひばりこども園、もりのくに褒育園川越である。

巡回コーディネーターとして田村禎章氏、杉浦公紀氏が参加し、川越町子ども家庭課と連携しながら実施された。

各巡回では、公開保育、園内見学、実践説明、意見交換、総括を基本構成とし、各園の特色を踏まえながら実施された。

4. 各園の実践と特徴

（1）もりのくに褒育園

「子どもファースト」「褒め育」を理念とし、小規模園ならではの家庭的な保育環境を重視していた。手ぶら保育や褒め褒め会など、保護者支援や子どもの自己肯定感を高める取組が特徴的であった。一方で、発達支援や保護者への伝え方、人材確保等への課題も共有された。

(2) 川越幼稚園

「自ら選ぶ遊び」を重視し、子どもの主体性を中心に据えた実践が行われていた。外部講師による年間約 20 回の研修を実施し、職員全体で子どもの見方や実践を共有する文化が形成されていた。認定こども園化への期待と不安も率直に共有された。

(3) ひばりこども園

異年齢活動やチャレンジタイム等を通して、身体活動と子どもの主体的活動を重視していた。ICT 活用、発達支援、保護者対応等においても、仕組み化とチーム対応が意識されていた。

(4) 南部保育所

絵本活動や異年齢交流を通じ、子どもの主体性と職員間の自然な連携を大切にしていた。若手職員育成では、一方的指導ではなく「共に考える」関わりを重視していた。

(5) 北部保育所

劇活動を「生活の延長」として位置づけ、子どもの主体性や異年齢の自然な関わりを重視していた。保護者対応や情報共有の難しさについても率直に共有された。

(6) 中部保育所

家庭的で温かい雰囲気の中で、異年齢交流や自然な子どもの関係形成が行われていた。職員間で子どものエピソードを共有する仕組みが特徴的であった。

5. 巡回指導を通して共有された主な課題

本年度の巡回を通して、以下のような課題が繰り返し共有された。

- ・未満児保育における人員配置と現場実態の乖離
- ・発達支援、加配児対応、保護者支援の難しさ
- ・保育士不足と職員の心理的負担
- ・保育士の休憩確保や働き方改善
- ・ICT 活用と情報共有
- ・安全管理、避難訓練の在り方
- ・異年齢保育と子どもの主体性
- ・保育士同士の学び合いと園内研修
- ・認定こども園化への対応
- ・外国ルーツ家庭への支援
- ・園間連携と相互理解

特に、保育の質向上を考える際には、実践だけでなく、職員が安心して働ける環境づくりが重要であることが強く共有された。

6. 各園の振り返り

各園からは、「他園を見ることで自園を見直す機会になった」「同じ川越町の子どもを育てる仲間として連携したい」「現場の工夫や悩みを共有できたことが大きかった」等の感想が寄せられた。

また、保育士の働き方改善や、現場負担軽減の必要性についても複数の園から意見が出された。

特に、「保育士に心の余裕があることが、子どもへの良い関わりにつながる」との意見は、本事業全体を通して重要な視点であった。

加えて、主任層だけでなく、担任等の現場職員にも公開保育や巡回参加を広げることへの期待も示された。

7. 総評

本年度の巡回指導事業は、単なる指導型ではなく、「相互に学び合う巡回型研修」として実施された点に大きな特徴があった。

各園は、それぞれ異なる理念や施設条件、人員体制を有しているが、子どもの育ちを中心に据えた保育・幼児教育を大切にしている点は共通していた。

また、他園の実践を見ることで、自園の実践を相対化し、柔軟に考える機会となったことは、大きな成果である。

一方で、保育士不足、働き方、発達支援、保護者対応等、現場が抱える課題も明確になった。これらは一園だけで解決できる問題ではなく、行政、関係機関、園同士のネットワークを含めて検討していく必要がある。

本年度は、統一的成果物を完成させる段階というよりも、町内の園同士が互いの実践に学び合い、率直に語り合う関係性を形成した段階として位置づけられる。今後は、本年度形成された関係性を基盤に、テーマ設定型研修や公開保育、情報共有等を継続し、川越町全体としての保育・幼児教育の質向上へつなげていくことが期待される。

8. 今後の方向性

今後の方向性として、以下のような点が期待される。

- ・ 園間公開保育の継続
- ・ 主任層だけでなく担任層への参加拡大
- ・ 発達支援や保護者支援に関するテーマ別研修
- ・ ICT活用による情報共有の合理化
- ・ 保育士の働き方改善
- ・ 認定こども園化に向けた連携
- ・ 外国ルーツ家庭支援

- ・安全管理、避難訓練の共有
- ・町全体としての子育て支援体制の強化

本事業は、単年度で完結するものではなく、継続的な相互学習とネットワーク形成を通して、地域全体の保育・幼児教育を支える基盤づくりとして発展していくことが期待される。